

ごはんを しています。

わだいのじいじ

— 102 —

TPPと農業

TPP協定の交渉が一応の合意を見たとの報道がありました。TPP(環太平洋パートナーシップ)とは、日米豪など環太平洋地域12カ国の経済協定のこと、関税の撤廃や引き下げにより貿易を盛んにし、経済を活性化しようというもの。世界全体の4割近くを占める巨大な経済圏になるといわれ、その成果について首相官邸は次のように発表しました。

「経済成長を促進し、雇用の創出及び維持を支援し、イノベーション、生産性及び競争力を向上させ、生活水準を高め、各国における貧困を削減し、透明性、良質なガバナンス及び強化された労働と環境の保護を促進する。」(TPP協定概要暫定版)。心配された農業面では、『守る農業』から『攻めの農業』に転換し、夢のある農業にする、とあります。

巨大な国際市場の中で、競争力を高め勝ち抜くことで、現在の多様な問題—雇用、貧困、生活不安などに打ち勝つ、と読めます。ビジネスの勝利は社会と生活の勝利でもある、という主張です。

米とパン

米を追い抜いたパン

私たちの主食は「米」ですが、実は数年前から1世帯当たりの米とパンの年間支出額は数百円程度の差で拮抗していました。しかし、平成26年度にはパンの年間支出額が4000円の差をつけて米の支出額を上回りました。この調査は2人以上世帯が対象ですから、今や総世帯数の3割以上を占める単身家庭を含むと、実際はもっと多いと推

定されます。店頭にあふれる多種多様なパンで空腹を満たすことは炊飯よりも簡便です。さらにパンに含まれる油脂や糖分には心身を興奮させる依存性があり、日本人は速攻で快楽をもたらすパン食の虜にされてしまった、ともいえます。

我が国の米の消費量は、この50年間、一貫して右肩下がり減少し、現在の1人当たり消費量はピークだった年の約半分。反対に右肩上がりなのは肉の消費量です。最近の20年間では米の需要は毎年8万ト程度減少、平成27年度産主食用米の需要は770万トを切りました。一方、日本は、米に高い関税をかける代償に主食需要の約1割に相当する77万トの米を、毎年、無関

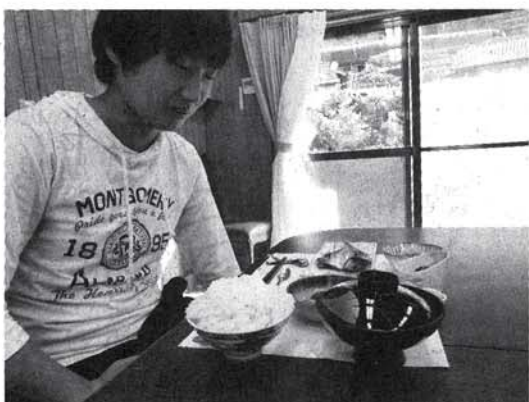
税で輸入しています。今回のTPPでも米は聖域として関税を守る代償に、さらに無関税の輸入枠が新設上乘せられました。米を取り巻く経済政策は複雑で簡単に分析できませんが、国産米は競争に勝ち残るために相当の『攻め』が必要です。安価な輸入米の過剰な流入と減少する米需要の中で、国内農業の体力と気力の限界が気になります。

インベーションと生産性向上が鼓舞される競争市場では、振り落とされる層もいるでしょう。勝ちでも負けでもない農業の方向性はないのでしょうか。

最近意外にも「下宿生活ではごはんを炊いている」と言う男子学生がよくいます。ごはんさえあれば満腹になる、一人暮らしの学生には経済的にも万能的の食事なのです。筆者もそうですが、甘い菓子パンを嗜好するよう消費生活の快樂にどっ

ぷりと浸かってしまっています。しかし、じつくと味わう「ごはん」の味がわかるのは日本人ならばこそ。消費者として、まずはごはんを炊こう、と自戒します。

競争社会における「勝負」へのもう一つの対応方法は、「じつくり」と味わう生活方式の取り戻しではないでしょうか。そもそも過激な競争の土壌に乗ることには「別の」方法、滋味ある「ごはん」のあり方についての方法論もあるはず。これは負け組の発想でしょうか。



ごはんが大好きな学生



かまど炊きに挑戦する学生

プロ
フィル



湯崎真梨子(ゆざき まりこ)
和歌山大学産学連携・研究支援センター 教授
専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。